

令和元年6月19日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03232

研究課題名(和文) 民俗芸能における共同的創造のプロセスに関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study of the process of collective creation in folk performing arts

研究代表者

俵木 悟 (Hyoki, Satoru)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：30356274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、備中神楽、大里七夕踊、石見神楽および芸北神楽の3つの民俗芸能の事例の実証的な調査に基づき、あわせてアメリカ民俗学の創造性に関する議論などを参照しながら、様々な工夫や即興的な改変を加えて「より良いもの」を生み出そうとする創造行為の積み重ねとして成り立つ民俗芸能の伝承の実態を明らかにした。この作業を通して、卓越した個人の才能による創造性とは異なる、人びとの共同的な相互行為によって発揮される創造性に注目し、民俗学における「伝承と創造」という対立的な見方を乗り越える可能性を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民俗芸能の伝承の危機が伝えられることが多い現在において、過度な「伝統」の重責を背負うのに代わって、それぞれの時代に即した工夫や創作こそが、これまで民俗芸能を伝えてきた原動力であり、これから次の世代に伝えるためにも必要であるということを、学術的な考察を通して示唆することができる。また近年大きな社会的関心と呼んでいる無形文化遺産の保護などの背景にある「生きている伝統」のあり方の具体的な姿を、実証的な調査研究の成果から学ぶことが可能になる。

研究成果の概要(英文)：Based on empirical studies on examples of 3 folk performing arts such as Bitchu kagura, Osato Tanabata-odori, Iwami and Geihoku kagura, and also referred to the discussion on aesthetics and creativity in American folklore studies, this study clarified the actual state of transmission (densyo) of folk performing arts as the accumulation of creation to make "something better" by adding various contrivances and impromptu modifications. Through this work, I have focused on the collective creativity that comes from the interaction of people, as opposed to the creativity of exceptional individual talent, and examined the possibility of overcoming the opposing view of "Tradition and Creation" in folklore studies in Japan.

研究分野：民俗学

キーワード：民俗芸能 アート 創造性 共同的創造 無形文化遺産

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の申請当時、研究代表者は民俗芸能研究に美学的（審美的）視点を取り入れることを試み、そのための調査を行っていた。従来の民俗学における芸能研究は、戦後の池田彌三郎らによる「制約論」に依拠し、共同的で慣習的な芸能の様式およびその伝承のみを民俗学的な研究の対象と規定してきた。それに対して、柳田國男の民俗資料論などを参照して、民俗資料としての心意のなかには、「良いもの」や「美しいもの」といった感性的な価値判断の基準（審美的基準）が、時代的・地域的なバリエーションをもって存在することを、「趣味」という言葉を使って把握しようという試みがなされていたことを知った（俵木 2014）。ただしそのような研究が、具体的な事例を用いて実証的になされた形跡は見られなかった。研究代表者は、それを鹿児島県いちき串木野市に伝わる大里七夕踊の「踊りの評価」に見られる審美性をもとに論じられると見通して調査を進めるとともに、今後の研究の展開を考えていた。

上記の調査を通して、民俗芸能の伝承を、単なる定型化した様式の繰り返しによる継承としてではなく、あるやり方を「良いもの」として選び取り、かつそれをさらに「良いもの」にするために工夫を凝らして改変する、広い意味での「創造行為」の連鎖として捉え直すことができるという構想に至った。そのためには、その時点で進めていた大里七夕踊の事例だけでなく、複数の、創造性のあらわれ方が異なる事例を取り上げて、それぞれがいかんしてそのような創造を行うに至ったかを歴史的・社会的文脈の中で検討するとともに、それら複数の事例を比較して、そこに見られる一般的な傾向や時代的・地域的な特徴を抽出し、そこから広い事例の理解に応用可能な理論を見出すことが求められる。そのためには、創造行為を狭く表現技法の問題として考えるのではなく、民俗学という研究領域の特性から、慣習化された伝承実践の再編成など「芸能を成立させる」ための諸活動の総体の中に幅広く捉えることが必要と考えられた。また従来の「伝承」の考え方の刷新を目指すという目的から、創造行為を、無から新しいものを生み出す行為としてではなく、それ以前から継承されてきた様式を素材とした工夫や改変の中に見いだすことが重要であると考えられた。

以上のような構想において、アメリカ民俗学で蓄積されてきた理論の応用可能性を検討する必要があると考えた。1960年代にテキスト中心の研究からパフォーマンス中心の研究にシフトしたアメリカ民俗学は、聴衆を前にしたコミュニケーションの様式としてのパフォーマンスの効果という観点から、口頭および身体による表現の芸術的 artistic ないし美学的 aesthetic な側面への関心は極めて高く、「“民俗学”とはあたかも“アート”の別名のようなものであった」（Glassie 1989: 36）とか「民俗学という学問領域はアート、芸術的、創造性、美的などの言葉にあふれていた」（Pocius, 1995: 413）などと言われる状態であった。

ただし近年のアメリカ民俗学におけるこの方面における研究動向の主流は、伝統の継承・創造における特定の個人への注目であった（e.g. Cashman, Mould and Shukla 2011）。これはアメリカ民俗学の主要な研究対象が、語りの芸や職人的な工芸など、どちらかと言えば個人の行為として理解されるものであったからだろう。一方、本研究課題で対象とする民俗芸能の多くは集団的に担われるものであり、参加する個々人は強い創作意欲を持ったりすることのない人びとであるのが一般的である。すると注目すべきは、複数の人の関わり合いの中で自ずと発揮される共同的な創造性であり、それが受容され、定着し、やがて次の創造行為の素材となるような、広範な社会的プロセスである。こうした研究視点は、少なくとも研究開始当初、日本の民俗学にはほとんど見られず、海外の民俗学を見渡しても萌芽的な状態にあった。

参考文献

- Gerald L. Pocius 1995. "Art" In *Journal of American Folklore*, 108(430).
Henry Glassie 1989. *The Spirit of Folk Art: The Girard Collection at the Museum of International Folk Art*, New York: Abrams and Mum of New Mexico.
Ray Cashman, Tom Mould and Pravina Shukla (eds.) 2011. *The Individual and Tradition: Folkloristic Perspectives*, Bloomington: Indiana University Press.
俵木悟 2014 「民俗 / 芸能 / 芸術」 民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』 丸善出版

2. 研究の目的

本研究の目的は、過去から受け継がれてきた民俗文化の伝承の過程にみられる創造行為を、具体的な民俗芸能の伝承実践を研究対象とした実証的な研究によって把握することである。また同時に、複数の異なる創造行為の特徴を示す事例を比較して検討することを通して、芸能伝承における創造行為を理解するための方法論的枠組みを獲得する目的で、海外の民俗学やその周辺領域における創造行為に関する一般理論を精査し、実証的な調査研究の成果への応用の可能性を検討することである。とくに民俗芸能を事例とすることによって、はじめから新しいものの創造を意図した行為としてではなく、慣習的な力学のなかでの即興的な工夫や、一定の様式における細部的な改変の蓄積が生み出す創造の過程に注目する。これによって、卓越した個人の才能による無制約の創造性とは異なる、共同的・慣習的行為に備わる創造性を浮かび上げさせ、旧来の民俗学における伝承 / 創造の二元論を乗り越えることを目論んでいる。

3. 研究の方法

研究の方法は、大きく二つに分けられた。

(1) 民俗学における創造性に関する一般理論的研究

まず一つは、海外まで視野に入れた民俗学およびその周辺領域における、創造性に関する一般理論的研究の摂取である。これは主として過去に公開された学術書・論文等の収集と読解による。とくにアメリカ民俗学においては、1960年代以降、その成果の蓄積が豊かであることが分かっていたが、邦訳されたものは少なく、その研究動向がまとまって日本に紹介されることもほぼ無かった。そのため、アメリカの大学図書館に出向き、関連論文等の精査を行う必要があった。

この点については、研究成果のところでも詳述するように、研究期間の1年度目にインディアナ大学に客員研究員として半年間滞在する機会を得たことで、当初の想定以上の進展が得られた。

(2) 具体的な民俗芸能の伝承実践を対象とした民俗芸能の創造過程に関する実証的調査研究

民俗芸能の伝承実践を対象とした実証的調査研究は、いうまでもなくフィールドワークにもとづく事例研究として行った。調査対象としたのは、備中神楽(岡山県)、大里七夕踊(鹿児島県)、石見神楽(島根県)および芸北神楽(広島県)である。これら3件の事例を選定したのは、それぞれ伝承実践に見られる創造性のあらわれ方に異なる特徴があると考えられたためである。備中神楽では、近年、過去に廃絶された演目や演出の復元上演が積極的に行われていることに注目し、過去と現在の往還的な交渉による創造行為であることや、限られた資料をもとに復元上演を実現するための人や情報のネットワークの構築などの点に特徴があると考えられた。大里七夕踊は、一週間という限られた期間の稽古(習し)を通して演技が習得され、しかも青年が一世一代の踊りとして務めてきたため、技能の蓄積ということがほとんど成り立たない。それにも関わらず、その期間内に身につけた踊りの良し悪しを評価する機構が行事の中に内在している興味深い事例であり、コミュニティの内部における審美の基準の構築をみるにふさわしい事例であると考えられた。石見神楽と芸北神楽は、伝統の継承が主とされることの多い民俗芸能において、現在でも積極的に新演目の創作が行われている事例であることから、新しい演目を構築するプロセスを直接的に調査できる事例であると想定された。また高度成長期からの過疎化・高齢化が著しい地域であり、そのなかで神楽が地域振興の資源としてきわめて高い価値をもっているところであることから、民俗芸能の創造行為と、地域の社会経済的背景の関係を考察するのにふさわしい事例であると考えられた。

4. 研究成果

(1) 民俗学における創造性に関する一般理論的研究について

本研究課題の1年度目にあたる2016年度に、アメリカ民俗学の中心的な研究機関であるインディアナ大学民俗学・民族音楽学部に客員研究員として半年間滞在する機会を得たことで、当初3年間かけて行う予定であった関連論文や資料の収集が大きくはかどった。申請時の計画では、2年度目と3年度目にそれぞれ一週間程度のアメリカ合衆国での資料収集を中心とした文献調査を行う予定であったが、それらを上回る成果が1年度目にして得られたと言える。とりわけインディアナ大学図書館では、アメリカ民俗学会と協力して、これまでのアメリカ民俗学の研究成果を(未公開のものも含めて)可能な限り広く公開する目的で、Open Folklore というポータルサイトを構築しており、多くの研究成果を電子媒体で入手できたことと合わせて、その利便性に助けられた。また同年10月にはアメリカ民俗学会の年次大会に参加し、最新の動向をうかがうことができた。

これら一般理論研究の精査のなかで、一部の研究者が、本研究課題のテーマと深く関連する共同的創造 collective creativity について論究していることが明らかになった。民俗学における代表的な成果としては、早くには Michael Owen Jones が考察し、また現在は Valdimar Tr. Hafstein や Regina Bendix らが積極的に理論を構築しようとしていることが分かった。

この研究で得られた知見の一部は、研究代表者が所属する成城大学民俗学研究所のニュースレター(その他)や、早稲田文化人類学大会で開催された「アート」をテーマとするシンポジウム(学会発表)およびその後開催された同じテーマの座談会(論文)などで発表した。さらに、今後の民俗芸能研究の学際的な方法論の転回を期して、2018年度の民俗芸能学会の年次大会で、「民俗芸能研究の新しい視点に向けて」と題したシンポジウムを研究代表者の企画・コーディネートで開催したことも、本研究の間接的な成果と言える。

(2) 民俗芸能の創造過程に関する実証的調査研究について

岡山県の備中神楽、鹿児島県の大里七夕踊、島根県・広島県の石見神楽・芸北神楽の3例についてフィールドワークに基づく実証的な調査を行った。

岡山県の備中神楽について

さまざまな社中や過去の太夫の演技・演出などについて史料をもとに調査し、復元上演を行

うことを活動の中心とする若手の神楽太夫のグループ「芳友会」の活動を中心に調査を行った。過去の演技・演出や演目を再構築する場合、その素材をどこから、どのように発掘するかということや、得られた素材をどのようにグループの内部で共有し、アレンジを加えるかが問題となる。とくに興味深い点として、過去の太夫が残した録音、ビデオなどの映像音声資料が重要な役割を果たしていること、また映像・音声を含むマルチモーダルな資料の共有のために SNS 等のインターネットメディアがよく使われていることであった。またそれらの素材から一つの演出や演目を生み出すためには、メンバー間の対等な関係の中での意見の交換を前提としつつも、それらを記録し、調整して最終的に台本のようなものを作成する素養を持ったキーパーソンが大きな役割を果たしていることが分かった。またこのような活動の動向が、かつて研究代表者が調査した「正しい神楽」を伝える（構築する）ひと世代前の太夫たちの活動（論文）への対抗の意識から生じてきた点も明らかになった。

この調査研究に直接関係する成果としては、論文、その他がある。また本研究課題期間には公刊されなかったが、この調査の直接の成果を、他の科研の研究課題の成果と絡めて著した論文をすでに脱稿して寄稿しており、2019 年度には刊行される予定である。

鹿児島県いちき串木野市の大里七夕踊について

本研究課題以前から継続的に行ってきた調査の成果をもとに、芸能の担い手たちの内部で見られる審美的な踊りの評価基準の文化的構成について論じた論文を刊行したのが最大の成果と言える（論文）。しかしその後、当該事例は大きな転換点を迎えた。それまで踊りの実施の中心的な主体であった集落ごとの青年団が、この数年の間に急激に活動を休止し、結果として本研究課題の最終年度にあたる 2018 年には、青年団として参加する集落がわずか 1 つのみとなってしまった。このような状況に鑑み、その後は、従来の組織や規範では芸能の伝承が立ち行かなくなるなかで、どのような工夫や試みによって困難を乗り越えるかという「伝承システムの再構築」という大きな枠組みでの創造行為のあらわれ方に調査の重点がシフトした。この問題は、従来の伝承組織や規範が長期的な歴史のなかで構築されてきたものであることから、より歴史的な動態を考慮した視野で行う必要があり、青年団の管理する活動記録などの文書の収集・整理にも注力した。その成果は、最終年度に複数の学会・研究会で発表を行った（学会発表）ほか、それをもとにした論文を執筆中であり、2019 年度中に刊行される予定である。

石見神楽・芸北神楽について

予定では、新演目の創作の事例として、演目構築のプロセスを、直接観察をもとに考察するのが当初の目論見であったが、残念なことに、本研究課題期間中に新演目の創作に取り組む事例を見つけることができなかった。そのため、調査は資料収集が中心となったが、その作業を通して、衣装や道具の製作に多くの新しい試みが行われてきたこと、また多くの神楽団が同じ衣裳店などを利用することによって、全体的な神楽の創作および伝承活動の結節点となることが注目された。この成果については、2019 年度の日本民俗学会の年次大会において研究発表を計画しており、今後も調査を継続するつもりである。

なお、新演目の創作ということについては、石見神楽・芸北神楽の事例ではなかったが、神奈川県の中津市で創作の試みを行った事例を紹介され、演者の協力を得て、実演を交えたワークショップを開催したことを、本研究に関連する成果として挙げるができる（その他）。また京都芸術センターの依頼を受けて企画協力し、研究代表者がファシリテーターを務めて開催した、民俗芸能の伝承における創作の新しい試みを、実演を交えて一般の観衆に向けて紹介するシンポジウムを開催した（その他）ことも、本研究の成果の一環である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

俵木 悟、「正しい神楽」を求めて：備中神楽の内省的な伝承活動に関する考察、日本常民文化紀要、査読無、33 号、2018、53-93

俵木 悟、復興のなかの発見と創造：震災復興関連事業に関わった一民俗学者の随想、高倉浩樹・山口睦編『震災後の地域文化と被災者の民俗誌：フィールド災害人文学の構築』、査読無、新泉社、2018、69-85

俵木 悟、伝承の「舞台裏」：神楽の舞の構造に見る、演技を生み出す力とその伝えられ方、飯田卓編『文化遺産と生きる』、査読有、臨川書店、2017、133-162

俵木 悟、民俗資料としての「審美的基準」へのアプローチ：鹿児島県いちき串木野市、大里七夕踊りの事例から、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、205 号、2017、435-458

小長谷 英代、原 聖、俵木 悟、松本 彰、[特集討論]「アート」：社会実践と文化政策、文化人類学研究、査読無、18 号、2017、68-86

〔学会発表〕(計 6 件)

俵木 悟、大正～昭和戦前期の地域社会における青年の生き方：いちき串木野市大里の事例から、成城大学民俗学研究所シンポジウム「ともに生きる：地域社会における結び合いの可能性」(成城大学)、2019 年 3 月 2 日

俵木 悟、「踊りによる修養」から「踊りのためのつながり」へ：大里七夕踊の改革の 100 年、日本村落研究学会関東地区研究会（青山学院大学渋谷キャンパス）2019 年 1 月 27 日

俵木 悟、趣旨説明：シンポジウム「民俗芸能研究の新しい視点に向けて」、民俗芸能学会平成 30 年度大会（成城大学）2018 年 11 月 25 日

俵木 悟、失ったものからの発見と創造：災害復興に民俗調査を通して携わった経験から、大学 COC+シンポジウム「地域歴史遺産としての「営みの記憶」 災害復興の現場から」（園田学園女子大学）2017 年 7 月 22 日

Satoru Hyoki, Considering the role of researchers at local governments (as “cultural brokers”) in Japanese cases of ICH, International Symposium on Glocal Perspectives on Intangible Cultural Heritage: Local Communities, Researchers, States and UNESCO（成城大学）2017 年 7 月 7 日

高橋 雄一郎・原 聖・小長谷 英代・松本 彰・俵木 悟、「アート」：社会実践と文化政策、早稲田文化人類学会シンポジウム（早稲田大学戸山キャンパス）2017 年 1 月 21 日

〔図書〕(計 1 件)

俵木 悟、勉誠出版、文化財 / 文化遺産としての民俗芸能：無形文化遺産時代の研究と保護、2018、312

〔その他〕

ニュースレター記事

俵木 悟、米国インディアナ大学における民俗学の研究と教育(3)、民俗学研究所ニュース、査読無、121 号、2018、3

俵木 悟、米国インディアナ大学における民俗学の研究と教育(2)、民俗学研究所ニュース、査読無、120 号、2018、3

俵木 悟、米国インディアナ大学における民俗学の研究と教育(1)、民俗学研究所ニュース、査読無、118 号、2017、3

一般向け講演・シンポジウム・ワークショップ等

小岩 秀太郎・清水 賢二郎・十川 みつる・原田 一樹・俵木 悟、シンポジウム & 公演「変わりゆく伝統芸能」、伝統芸能文化創生プロジェクト（京都芸術センター）2019 年 2 月 3 日

俵木 悟、神楽の歴史と変遷、里神楽ワークショップ in 成城大学～生きている神楽～（成城大学）2018 年 3 月 21 日